

一名
除蝗
云

農家調寶記附錄完

特279

特279-265



1200501132177

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



第十四號

大藏永常著

江戸横山街
書肆五巖堂

曲辰家調寶記附錄全
一名除蝗錄

特279
265

書、田、蝗生、時油とどもみやくすりに仕方とて
記、且氣候の油油の倫、蝗の種類とまを、
おひびたとひるゆうの敵を、蟻、そりもと、凶犯かくと、肌體
よじらざるやうと、うに記、これが農事の必用へねべき事も

農書十二種序

管子と書者と曰先王為民興利除害而謂興
利者、非善事也、而後除害者、善者也、夫
先王興利除害之政、既立法載在于典以舊者
至矣、書矣、何寔後人之物、守惟于政法必不
得、不待耕者之勤率也、然則耕者之固、亦
不研究精討、矣、予之本大志、忘以家船乃祖、
志、夙夜心於此、逾七十年、め一日遂終平四方以

試之重風止榮更最前便為國事以芳書稿
至十三部豈曰農書十六種曰老農業話曰農家
蓋曰農具便利篇曰農稼錄曰耕種方曰除蝗
缺曰民家教育學既梓於世亨化曰培養而
方曰棉圃務務曰甘蔗大本曰抄紙必用曰薑
移策方錄曰民間書簡法陸續上木七日者
保持手書未永乎、復苦昧一夕不復、立稿
亦益伟矣、詒曰：「除害矣，育苗之於農事
也。」均是未振鎗鋒矣。翁之未耜獨能良之均
是相五土之性矣。翁之所求土性獨能宜也。均
是澇疏矣。翁之所求獨能溼也。均是旱澆矣。
翁之所求獨能潤也。均是除獨能治而所蔬獨
失傷保焉矣。翁之所求獨能通也。均是旱澆矣。
翁之所求獨能潤也。均是除獨能治而所蔬獨
失傷保焉矣。翁之所求此甚課民勿民皆
忘四體之勞而堅獲亦信從焉。然以此書也於
先生興利除害之政必不可阙者也。君子曰君不

如老農者不必老圃也老農老圃反不偶吾如
如老農者欲有姓大老農名承為字更號保和
德兵衛老翁子號也豐後日田那人也後徙家
于大坂焉為人多好浮善之事性沈默而有
素恩今亦久故而咸初志又未于江戶一日過
契舍考予書詩一言固書之以為序云

秋田奥山聖提同

除蝗錄叙

國以民為本民以食為天無食斯無民無民
斯無國是故先王之政以足食為其首務而
勸農為之要後之為政者可不盡心焉哉

國家昇平二百有餘年億兆鼓腹於雍熙之
化猗歟可謂盛矣然而水旱饑荒不能保時
無之凡民之情必有所賴而後安有所望而
後勤國家救荒之政固亦無不備具而獨

於除蝗之方則或未之有講也不獨我邦為
然而雖漢土而亦炎火祈祝之外寥寥乎未
聞別有其術也豈以其出於天者人力不能
勝之歟抑有其方而人未及知之歟豐後有
大藏龜翁者為人朴實夙篤志於農務每有
所聞見輒記錄之作農書若干種曩嘗得鯨
油除蝗之方試之西南地方見有効驗救民
不貲因今作斯編欲廣布之東北使天下遂
無蝗患嗚呼果謂人力不能勝天耶或者天
誘其衷乃爾雖如人力而竟出於天意者歟
昔唐時鱸魚為患韓愈作文以去之至於明
時鱸魚復為患而夏原吉則沈礦灰以去之
一感以誠一謀以智然其祛患也均矣夫其
出於誠感者不能學之而至於智術則苟遵
其方人可學而能之也今龜翁除蝗之術
謂之原吉之智可也我邦亘古所無而今有

之漢土所未知而今得之遂能使天下無復
蝗患則其功豈翅去一鱸魚之比云哉翁之
斯書雖曰農爾其於國家勸農足食之政
庶幾乎有所裨益也及其丐言余樂叙而道
之

文政丙戌三月盡

江都一齋老人佐藤坦叙

除蝗錄 全

無論

大藏永常著

矣氣候久不常時ハ鶴立蝗生ト害代多アテ御體
少々是天下的一大患アリ御ノベ農家皆て房の
方と多くまんハ有ヘシハ尤様ハ頃近ヘ西園易アリ
是代子久ニシ事ハ未トヒトニ蝗生トハ今年より更盛アリ
人集アリテ大鼓同音ト一疊大鼓トヨレヒテ田乃
以テ驅を巡ルナリ外ニ走ベキ道トモニテアキ彼國

藉民の書狀も増を以て増と追ふ方られずより
前文乃不見上記するのと享保十七年增生に

流事甚しく諸國ノ農家是成患よと云ひ

人より之をきゆるあり一ト外人並々難高ニ至る那

ハ尋氏其威風蓋乃うち小安置一ト古廟ニ置て

增除えり紙引或夕脚於と捧むより上増殿

群て燈油の油入を取れ毛と見て油乃増上大敵

た年を心付田中油火をきて武者に須臾

煙の光も。年數一走り昼夜精力と盡り

油火用ひて稿後じ病卫其田實ら年と得たり

冥ニ至れり冥耶ありとゆく種持して車の轍

を事持されし事なり中之是と考へ此乃増除

事其後既たり唯その油も又餘油れ加の速う

且あくへな一物れども其は未練油の速功あり

せちよとすすり一物り候其享保子年乃馬猪也

メハ年夏冬を重ねぬく氣候也

子年より淫雨あけく多度もく四又五月未だ
國五月の下旬迄霖雨益甚成るに於月初旬より雨や
むじつより氣候寒冷して暑うひく又中旬か一
て白雨をこぼり其後より蝗生じ稻乃苦少食枯し
久終是堵國一統多忙して地盤よゑ不無し身
はき農民へうきすまのむくわつて此手書きし
侍ひり古老の口碑よりも少てて植わゆく後五年半を
あり直後天明二癸卯年同七丁未乃まへて已れふ

水一そ諸國又禹作より所甚頃の東君歲みて生國
之といひて
豈後日因より一が冬より春よりけて饑と云ひ至
といひ事とは窮民也一秋徂又よりのほく然宜
何されと富高乃家每工人教を正すはけ彌々と春
ハセモト事ア伏見召びぬを度かしきの本作ひなどを
此年程の主作アビビ地盤中文化より文政セヨミ
のちハ毫卓年ホ後多民被腹して太平とうたへ
宣す行ひよれた御代をうとふよはキシヒの年

ハ畿内より東京乃古宿舎多く生す。東海道筋へ
移るよりは、すすむを列よりて、ひ田更河身はとひ、
どもいよせん棘油乃正焉もと幸成福喫事と有
し、先年菜種ゆゆふて塩をまへと此仕方ば人工す。
用ひては、もと其功棘油より方正めよば速よへず。
さうと云ひ大井川乃をよる上新田村立宣す。
その真前の裏、たゞと見てあくも塩生ト立宣す。
其間は、うよひり其川館乃ゑよ田へ菜種ゆゆゆ
五度入塩乃ゑよ田へ油まで三度入塩の少き田へ
か一もへとて、供りて塩美くて油ぬくひしたる田
七八歩の程、ねず塩乃ゑよく油まで入たる田の四分
の程とあり塩を多くて油つれず田へ移すと塩と
をうそと其人移すと、りゆゆすと、も解て見りよふ實
非其言の如ありと、嗚呼、は時小ぢうて棘油乃備あ
らばいそろか塩乃ゑよとしの者、とぞと嘆息をなす
甲斐あ、やむ先年豈後う尾社氏も農支

肥後國小豆^{アマ}蘇^{スカウ}浦^{スカウ}事^ト付^ト其^の
御^{マサニ}肥後一國^{シキ}もろ^タ地^チ頭^ト備^{スカウ}付^ト一^{シテ}年^ツ四
斗^ト八^{ハチ}桶^{カタ}五^ゴ岐^ヒ平^{ヒラ}戸^ト正^{マサ}美^ミの蘇^{スカウ}浦^{スカウ}武^{ムサシ}挺^{タケ}安^ス
今^タ多^タ木^キ村^{ムラ}田^タ久^ク通^{スカウ}割^{カタ}海^{シカイ}一^{シテ}管^{カタ}生^{スカウ}死^{スカウ}時^ト
直^タ多^タ木^キ浦^{スカウ}死^{スカウ}管^{カタ}あ^タる^タ事^ト小^コ用^ト石^{イシ}浦^{スカウ}
か^カ小^コて^カ管^{カタ}事^ト其^の患^ハい^ム一^{シテ}あ^タる^タ九^ク列^{カタ}乃^ハ
御^{マサニ}諸^{サカナ}家^{カミ}方^{カミ}大^{タカ}休^ハ公^ハあ^タわ^タう^タ事^ト相^モ取^ル秋^ハ
里^リう^タへ^カ備^{スカウ}あ^タる^タ事^ト其^の實^ハう^タれ^タ事^ト事^ト也^ハ世^カ管^{カタ}

低^ヒ田^トの水^{スカウ}多くて乾^{カタ}くとあ^タき地^{カタ}少^{スカウ}な^{カタ}べ^タ烟^{スカウ}少^{スカウ}
そ^レそ^レて^タる苗^{スカウ}れ^タば^タ路^{スカウ}經^{スカウ}水^{スカウ}渠^{スカウ}通^{スカウ}一^{シテ}の^タ筋^{スカウ}却^ハる
猶^タ候^{スカウ}す^タの^タ水^{スカウ}と^タ引^{スカウ}げ^タて^タ干^{スカウ}す^タ不^{スカウ}可^タ

植^{スカウ}屋^{スカウ}

○^タ務^{スカウ}は^{スカウ}國^{スカウ}伊^{スカウ}丹^{スカウ}の^タ近^{スカウ}き^{スカウ}少^{スカウ}て^タ右^{スカウ}よ^タく^タ苗^{スカウ}代^{スカウ}も^タ打^{スカウ}
水^{スカウ}も^タも^タづ^タ一^{シテ}入^{スカウ}金^{スカウ}而^{スカウ}少^{スカウ}て^タ干^{スカウ}す^タ數^{スカウ}多^{スカウ}く^タは^タて^タ
苗^{スカウ}と^タや^タら^タ之^タ夢^{スカウ}之^タ此^タ打^{スカウ}干^{スカウ}半^タ、^タ半^タ、^タ半^タ、^タ早^{スカウ}魅^{スカウ}
小^タ苗^{スカウ}の^タ少^{スカウ}なる用^{スカウ}と^タあり^タと^タ又^タ半^タ植^{スカウ}一^{シテ}一^{シテ}

まとと水とおとへ因とかく一の干しれをも
と能^{えん}鐵^{てつ}鐵肉^{てつにく}あて用^{もち}
うぐてもまはげ干^{いぬき}れり小^お押^おしむべ^お山^{さん}苗^め
葉^は赤^{あか}くわれどもとくもおどろくとあくみ
竹^{たけ}川^{かわ}き^か二^に日^にのうち小^お苗^めの勢^ぜい十分^{じゅう}小^おあら^{あら}知^し
もや馬^ばもさ^さ成長^{せいな}つともや^やくかせ^せ
すれうとあり

○さてまたまよふるを雌雄の備^{そなへ}るの

妻^めは小今^{こいま}諸國^{しょくこく}小產^{えん}物^{もの}は^は否^い否^い也^よアリ^{アリ}
體^{からだ}の備^{そなへ}て其面^{おもて}を^を叔^お老^{ろう}と達^{たつ}其^{その}處^{ところ}アリ^{アリ}シテ
事^{こと}ハ藏^{くわ}小^こ石^{いし}アリ^{アリ}シテ拂^は思^{おも}石^{いし}アリ^{アリ}シテ^{シテ}在^あリ^{アリ}シテ^{シテ}アリ^{アリ}
コ^トノ^ト事^{こと}小^こ石^{いし}アリ^{アリ}シテ^{シテ}是^{これ}小^こ都^と鑑^{かがみ}乃^の時^{とき}ト^トアリ^{アリ}シテ^{シテ}故^{ゆゑ}原^{はら}記^き
セ^ト一^{いつ}如^{ごと}程^{ほど}心^{こころ}火^ひと^とアリ^{アリ}シテ^{シテ}一^{いつ}時^じ小^こ其^{その}用^{よう}の熟^じト^ト
行^ゆ居^ゐリ^{アリ}シテ^{シテ}事^{こと}ハ天^{あま}在^あ地^ぢ右^うの事^{こと}理^りト^トアリ^{アリ}シテ^{シテ}日^ひ月^{つき}星^{ほし}辰^{つち}
東^{ひが}シ^{アリ}西^にアリ^{アリ}シテ^{シテ}事^{こと}ハ天^{あま}在^あ地^ぢ左^さの事^{こと}理^りト^トアリ^{アリ}シテ^{シテ}日^ひ月^{つき}星^{ほし}辰^{つち}
事^{こと}文^{ふみ}立^た九^く列^{れつ}子^こ十^じ世^せ事^{こと}隣^{となり}合^あ今^い人^{ひと}東^{とう}海^{かい}通^つ筋^{すじ}

追へ用ひとす。其術甚未熟。行きの術みて
皆に歎ひ。とぞ。よし。蘇州乃遠。即ち。車駕五。一
か。馬在。是其。より。行。ま。む。之。村。出。た。と。人。今。も。術。
解。一。ゆ。い。て。そ。の。裏。ひ。と。社。は。お。ん。車。以。御。て。移。を。農。家。
此。り。以。候。不。事。に。ら。ま。べ。て。心。と。車。ト。又。う。ト。三。
若。う。ト。財。老。農。の。事。か。と。ま。か。は。首。う。ト。煙。と。
逐。う。か。よ。き。道。か。と。四。ひ。け。と。人。ま。神。が。見。
て。ま。車。以。走。一。ゆ。急。此。後。小。事。保。あ。う。一。の。如。此。健。
ハ。首。え。し。と。い。立。移。る。車。と。ぞ。ま。傍。人。行。色。ハ。煙。以。手。
術。ハ。手。の。机。儀。を。す。ア。オ。一。乃。は。一。モ。モ。も。う。ん。ひ。う。う。
紅。術。ハ。の。う。ト。と。善。人。の。伝。あ。う。ト。伏。は。く。思。ひ。こ。え。一。
ま。か。え。や。も。云。如。く。そ。び。く。此。書。代。は。う。ぬ。思。ふ。人。云。
の。身。が。切。え。き。微。心。を。表。す。一。ゆ。ひ。て。後。世。山。術。代。用。す。る。
行。べ。仰。風。志。を。並。ぬ。と。立。一。
氣。候。の。輪。

不れの氣候と伏若と云ふと云ふのもうと或を農
乃とのつまうさととても甚ず伏坐すは
富く氣とて問けりおねば多翁先生をよむ
五を書とて一小冊伏せしと多翁先生之をやふ
せきまくやまく書く並め伏せしと
問云かづかづかづかづかづかづかづかづ
春日青年夏の初より秋と重り雨と多く冬と雪
をもるるれへ水を圍てまで耕し春と曉へ塙らの
指云べ

如是と水と仕合ひ前代學問のころけ方甚也
て其の種自僅と塙に生じ乃ぞ可乎然矣行障
乃犯土木生じ青多紫と色人乃庶然生じ
不知在塙の事未だ至れまで付疫らずより流
れちゆくとも思され又強ち度小室をす
と春角一概とハ繕トモトと付すと事すと
用ひて其ち耕と云ふと向又理のむくと申すと
指云べ

問云 之よりへ農事小再三耕して干土をもとめ置
きよあら

答曰 耕へてのからく水を多く耕せば水を多く
まつて立りて雨雪常通の通じれば候もれがまく
耕して土が干すとあくまでものゆきをもとめ置
きよあらとへ其心得有るなり

問云 去秋より今宵近雨害いを失ひて耕を失
けたて水をもとて土が干さなむとどうりかよすまで
右備の如く壇乃生根がりふああてなしも育て一株を
深根始終水をもどかず時より又よきも壇生下たる
べの理ある

答曰 不審むの事より壇の生根を右す備べ
はるゝも年々の氣候よりて恰も时疫の如くを
きへば原因も其のの时疫より伊藤にて壇生下る
あり根ども其毒根く刻をもとめ此事もや
ほほえ或へ薬根の根也あくの常事ふと増加する因

ふへまゆ年初を壇害乃よりてまくとて
問云論のどくあるがま耕又へまゆ乃國よりてま
年乃かく憂ひもれきやうへみゆ心ひを宣
くべき也

答曰或農主今年田土の干涸たる所等壇害りしん
まゝば未除る量で春圃荒蕪而已みて再耕せ
ば麦ぬも荒蕪のとて再耕せば一ト兩回仕事
を數のとて耕してあを極たる人あり且餘乃田へ壇
て再三油入近喜田へ害なく虫無ま至りか一壇不
け色へ皆て油入のとて地の脂ありられば即時よ
退去一すすす五六日かして又生び害はらん終ひへ
見ぞされども後のわせき乃高主と油入地無す
ての折縫も作一比まれば十石一石もかくす
或人曰ナホの年よへ麦ぬ乃多く水犁耕て年を充と
○某年壇見へども尉も見りて随てに合赤三五絆入が
シ一耕半ば年よへ壇無ふせきをせざる年よへ麥度
あり又旱乃か一石へ水お宜一されば倍ほのうえ三度
の油便ユ少くもひたひ多利也

蝗とテウの便

漢土みてへ来てテテノ根久又野逐詮灰とテアムの本
テテア本邦ニ同ト秋國みてハハツの源テテガリシ
云ヨリ群のあゝか水を猪列一統中通ヒトモミ
寄テテ一村集てね筋火燎——彌太教トテテトキモ
草葉を人形河ヒトモ人紙舞も火火ヒテ燎と吹舞は
カケ燎連とテ一回の睡を起テテノ根筋火燎リテ四三を乞
のやうヒテ燎火原に持見六日休未モテ燎盡く燎とテ死



お接げふ夜の雪乃人多し
群毛屋より集う已とす
さて雪乃屋にてはねの代後
船大轍を走りての
廻を巡とばま事より集うり
船大轍て横舟石垣逐とる
より始一とくさきとス室也
上人の六秋入会佛も出たり
も之り人多し群毛路大と島多
て築けども相
全車を起す所とへづれば終大且て幸の如ふと又
そぞりすりばすする國へ右車あすらすれども
術みとしのまきがえをよして行成持
空車玉

正めの事ばま事の候とてその国人をしてせり候とし
んと再び拵よまつて西園より小昔年ハ才公太公とへ候
の所より形は事わらじとて文と云々と云々と云々と云々
欲する事の速もとて先えて茶、煙草油の壇
蘇油坐てまゐるはたゞぬる國乃農業乃作業者保
の頃へ油坐てまゐるは山をむかひの多
モ一ぐ今へ油坐てまゐるは山をむかひの多
車代えのとへ此後常保とへ向浦毛門和年經乃

飢餓もむさしとそり夫人の然ハ親小ちくとまう子兒
才ふ死よと御のかかへとハラレし保一乞ハ私ゆ之
せ間の才へとくは思へ煌乃生びらうへと御へ農
ふては嘗歎怪力成車一歎余小久禮をすみ是もと
思ひ一やほへ取えハ瘦るるに良事所あきびて
死よいたゞひとくに似きア只も年華を禮乃歎去
さする者よ降り

煌の経歌

日原翁の太和中更に煥膳房女賊の四生成蟬とソイナ
のれうりと河内守端工才官ハ教生なりと見リ其國くみて
名うりスウモたずせり。ト是所せんそくも下水嶋あゝ
まへ立身生すらすばゆ

蟬
俗少ア實盛ち之茎葉のあが吸て害と云ひて病了ハねぬ
てすれり又ゆふて落べ

臘

集多ア解アスミヒバイナコモア心を食ててアイチア
鶴が害もくのと云ひて落すす茎もく人よも害かれてす

壳虫とても茎るよ。一虫の体にてまた結構生む事無
き。此の物たるは虫類乃は多うまれたりとす。且
是代見る上根乃ちかく白きも多うあり。則是より故云
伸と入陰。一虫にて極至の形に出たり。はなへて君
身白に根生にて右のもだうあるえ。又田水を序すなし
事。終り再び再生す。一茎にて。茎にて。癰む事。又葉が
茎と葉と身を有する。先づ沙地に沙代りとのどさきと。又出
極小なりて生じ。はね。極もくしてぬるよりの之是代をす
又水を仕立てたま油を入樽の桶まで。す様。又ふ極の外
みてくづけ。御い草にて。一虫にて。一茎。取經水をなす事
常乃ぞ。一虫成るべし。○中風去りふ事。一虫
圓柱て。又氣使。唐令所。極出事。と見得事ゆりもの。

賊

毛虫とて。かく。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。

飛虫

一虫とて。毛虫とて。小虫とて。毛虫とて。毛虫とて。
實盛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。

苗虫

尺蠖の如か。て。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。
て。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。
實盛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。
毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。毛虫とて。

毛虫

總票其外小も群集くわいて蟻を取入石上批ひとあす其害がふう
らん陰方のどきよへねぬと見みたす其發はくと其田た乃の晒あふ所ところば危あび
來きてナケルなくアシキスしテ墮おち

具原先哲こじはらせんぜつの日ひホウノ漢かん名めい譯いつ

蠍かの特とく性せいある人ひと暮くすよ併あわて其色いろ青あおく 總票ぜうひホノ事こと
合あて食くひ居ゐる處ところにナリキきと知し一葉いはに天あまて其肉にく工くわ剥むしんは虫むし
早はや寝ねく時とき生なだ防ぼう方ほう苦く辛からト 姦め幕まくふて水みずアラ
く二三日ふたさんひを正ただればする之の但大同おおとう可ことが裏うらを吹ふ破はして引ひく陰かげ
主おひりスハ羽化はうかて故ゆゑのうそのれの小こ蟻ひとあるを害がす

虫むしくそ葉は

金かな小こ虫むしくそ葉は
金かな小こ虫むしくそ葉は

金かな小こ虫むしくそ葉は
金かな小こ虫むしくそ葉は

油の論

煙えんを去はなふ用もち五厘ごり油ゆヘ蘇よ油ゆと最上さいじょう五味平戸ひらど蘇よ其その
外ほか洋よう油ゆナリ此この正真せいしん乃の蘇よ油ゆと其功速こうそくナラフ

御もよひろく 雜魚油を見合ひて 雜魚油の筋
ハ主家の田小蘇油五合入て 東本^{トモ} 雜魚油へ合す其筋も
入ずれば主乃^{シテ} 蘇油此^ソ及^シば^シ直^シ類^トあり^シされば^{シテ}
そぞ入て あひ小^{ナニ}供奉^{ナニ}○直^シの蘇油乃^{シテ}直^シ四斗^{シテ}合^シふ
て銀百目^{ヒヨウ}布後^{ハシ}うすを升^ス名^シ銀鐵^{シルバーチャン}○九列^{クレ}又^{シテ}鐵^チ等^ト
車^{シタ}の把^{ハシ}あみ^シ赤古^{シタマツ}車^{シタ}を所^シ賞^{シテ}ほしに車^{シタ}ふれば^{シテ}車^{シタ}内^シ
きふても^{シテ}は百五拾目^{ヒヨウ}肉外^{シタマツ}又^{シテ}直^シうすを^{シテ}○鐵肉^{シルバーミート}の^{シテ}水^{シテ}
ハ蘇油^{ソイ}の直^シ上^{シテ}西園乃^{シテ}增^シ不^シと^{シテ}車^{シタ}○綿撲^{シルバーパット}の油^{シテ}
乃^{シテ}あどろ^{シテ}綾^{シテ}絞^{シテ}たま黒^{シテ}面^{シテ}の油^{ソイ}菜^{シテ}籽^{シテ}油^{シテ}乃^{シテ}五^{シテ}段^{シテ}一^{シテ}
ラト^{シテ}少^シの^{シテ}蘇油^{ソイ}を蘇油^{ソイ}圓^{シテ}一^{シテ}入^{シテ}車^{シタ}うすに別^{シテ}鐵^チ
主^{シテ}作^{シテ}油^{シテ}を^{シテ}下^{シテ}車^{シタ}を^{シテ}前^{シテ}若^{シテ}敷^{シテ}岩^{シテ}見^{シテ}生^{シテ}雲^{シテ}を^{シテ}油^{シテ}相^{シテ}廣^{シテ}名^{シテ}開^{シテ}萬^{シテ}子^{シテ}桐^{シテ}人^{シテ}毒^{シテ}油^{シテ}又^{シテ}大^{シテ}
多^{シテ}煙^{シテ}生^{シテ}ト^{シテ}大^{シテ}油^{シテ}代^{シテ}うすを^{シテ}○九列^{クレ}よ^シて^{シテ}火^{シテ}が
死^{シテ}火^{シテ}培^{シテ}の^{シテ}油^{シテ}の^{シテ}うすを^{シテ}入^{シテ}車^{シタ}うす^{シテ}○九列^{クレ}よ^シて^{シテ}火^{シテ}が
入^{シテ}うす^{シテ}蘇油^{ソイ}交^{シテ}し^{シテ}種子油^{シテ}を^{シテ}升^スと^{シテ}升^スと^{シテ}蘇油^{ソイ}代^{シテ}
油^{シテ}よ^シて^{シテ}火^{シテ}培^{シテ}の^{シテ}本^{シテ}も^{シテ}花^{シテ}菓^{シテ}に^{シテ}虫^{シテ}附^{シテ}蘇油^{ソイ}を^{シテ}葉^{シテ}
走^{シテ}火^{シテ}小^{シテ}か^{シテ}——^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}子^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}火^{シテ}死^{シテ}

除鱗錄

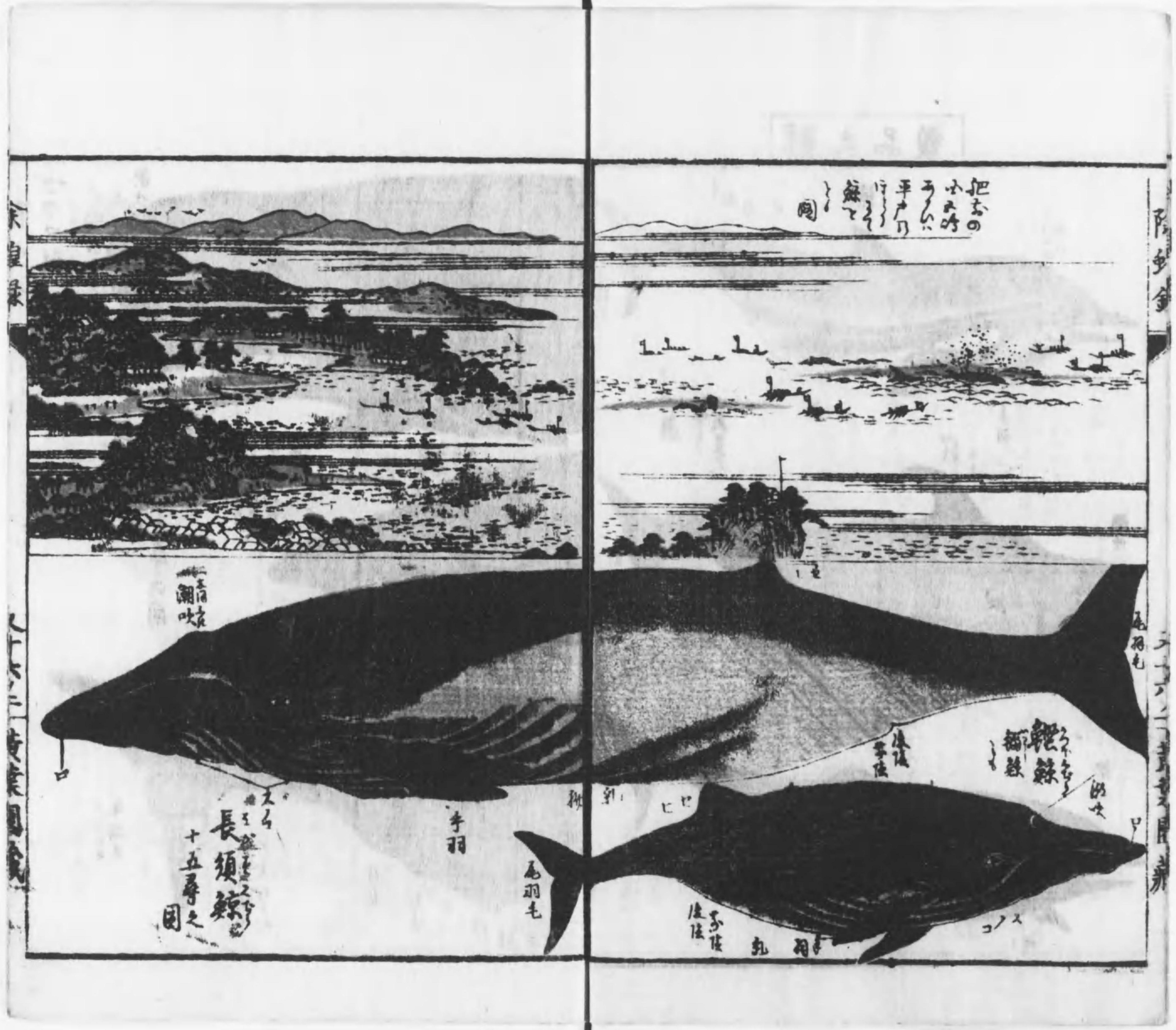
十六

崖葉園編

唐ふあう或ハ水及和テ塗ふべからば備乃ち生く
所は程中に歎はむ鯨小五種六品のうる見座頭高須頭
長須白長須兒鯨青サギ鰐鯨鯨鯨クジラ五種八類六八直甲鯨
撫鯨赤坊鯨サカマタヌキサツトニドコト鯨ホコトナイハトスナメリ
鯨等の種れなり其角用ひて功あると油なり鯨油のうも
鯨油クジラ油家事志てまつり粉ホウ鯨油クジラ油ハ油りてすヒヨウ
鯨油クジラ油ハ油りてすヒヨウ油の見人分拂フツルてよシテ
とくは程の扱儀なり是ハ直よ油瓶見て云けざる事アガ

鯨之品類





陰鰐金

六十力

金魚圖卷

ニツコ鰐
二元

座頭鰐
七參之圖

尾羽毛

白毛の身毛
の身毛

腹

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

左

右

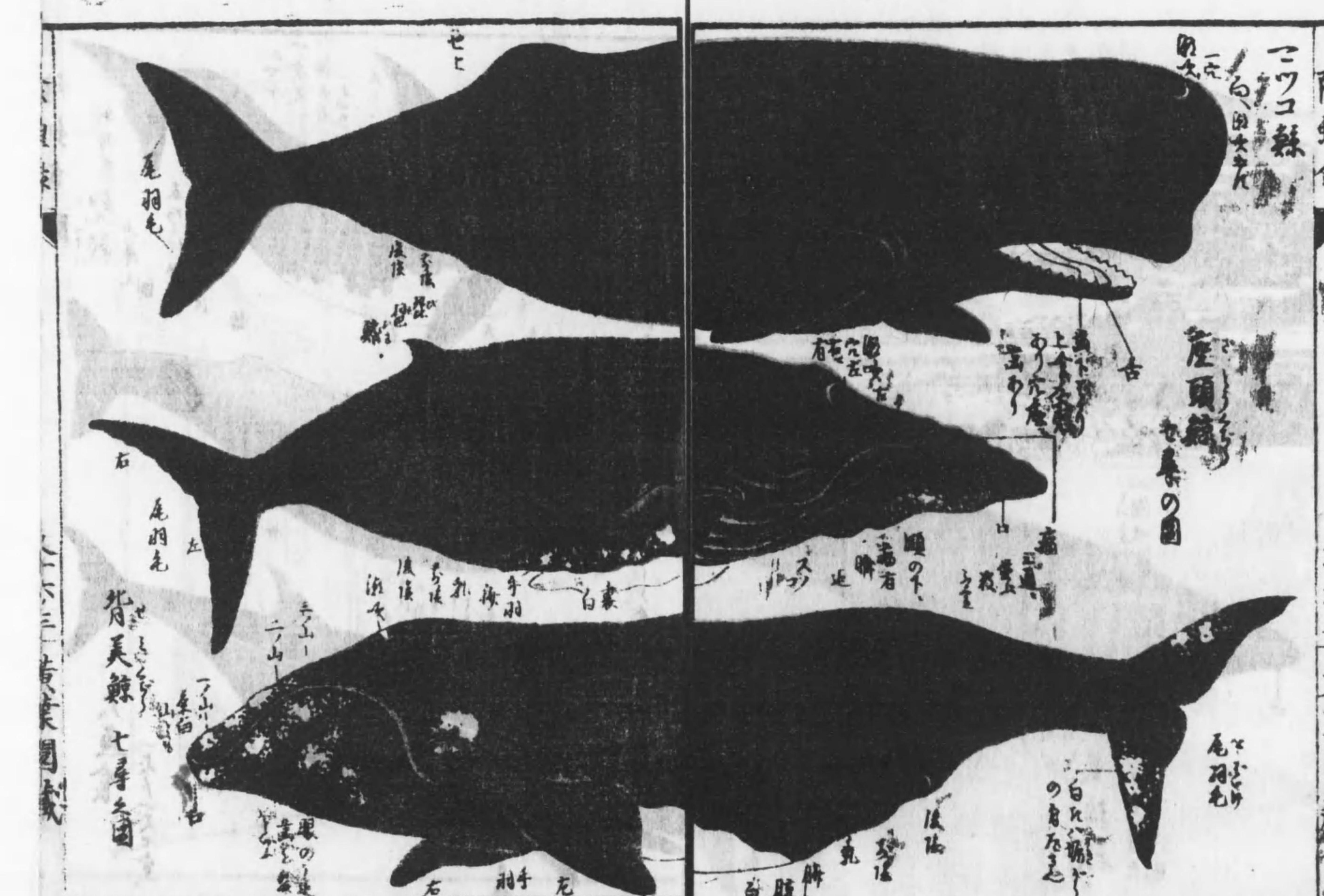
左

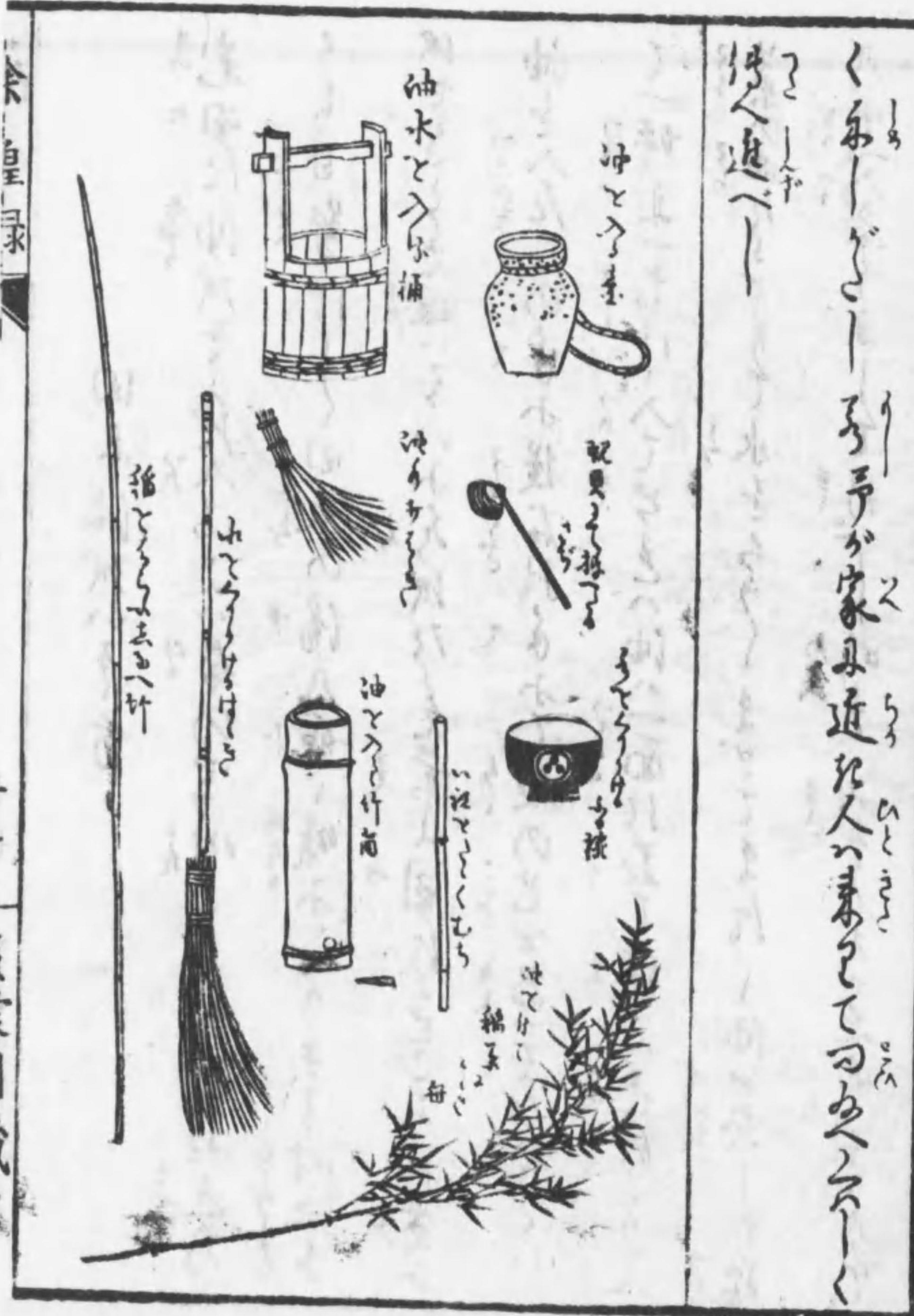
右

左

右

左





くゑーどーす予が家近人へまゐりて可也ふく
ほへ道へー



圓水油煎いき方

先國に油煎りて入る。ハ屋の口ヲはす。ハツナ時近乃
うち日暮はす。圓水の湯乃が、暖ふ。みゆきの時水下
城せきとえ睡一ぞいふあ候乃え。す。圓水をこうれ。ま
油を入れりのま。手提右れ。ま。て。塊のビ。さお。て。ひすく。い
て一坪。且一七。び。入て。口。と。油。ハ。一面。に。お。て。海。と。入。其。の。う。又
薑の曲た。と。り。て。水。を。う。く。ま。ざ。て。ま。け。一。油。と。お。一。て。稽
八。中。へ。入。る。よ。し。て。り。一。岐。と。又。そ。人。ま。ち。木。を。う。り。て

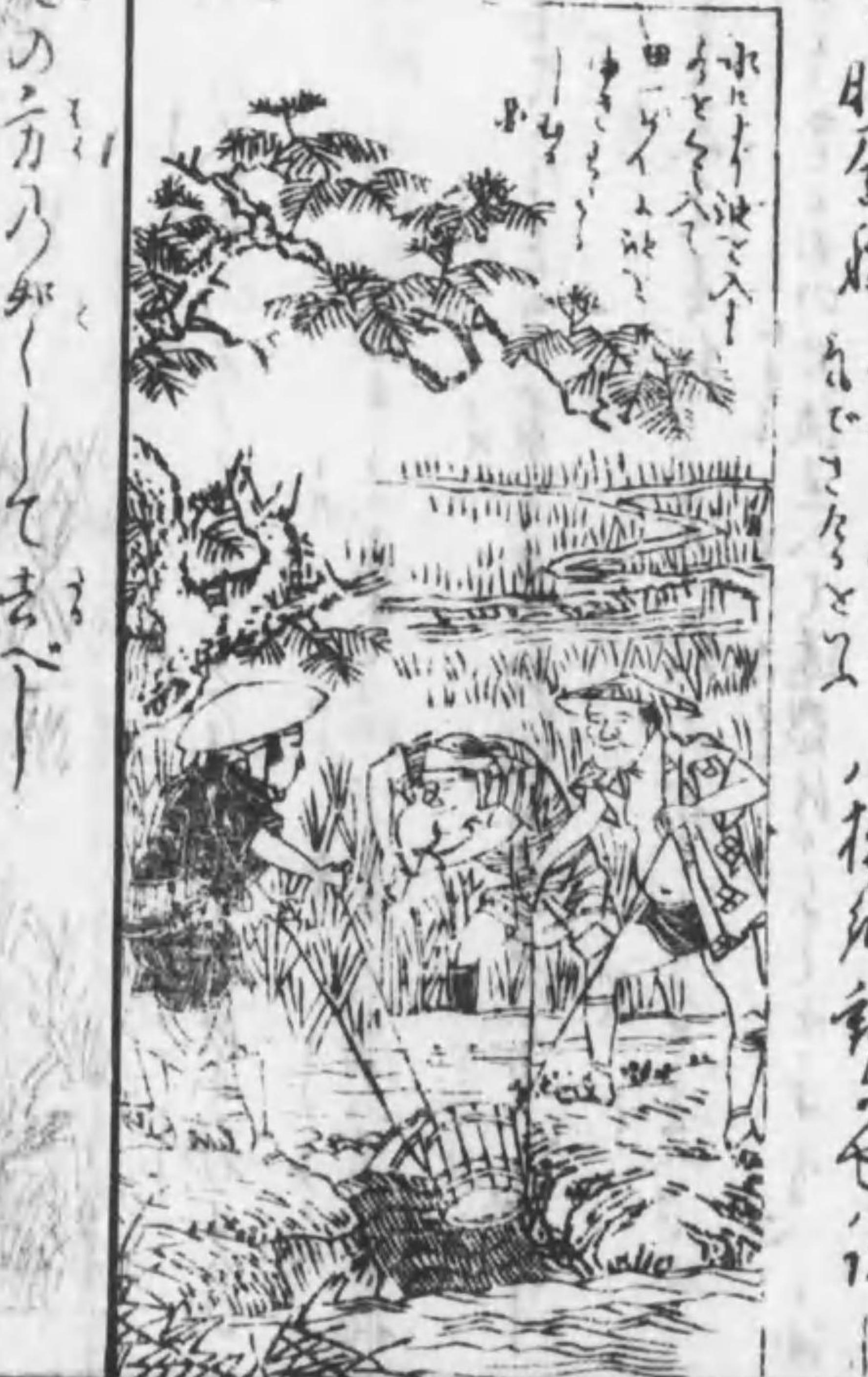


東風の時ハ東乃隅ト西風の時ハ西乃風ト也
いた左箱をふりたふりと箱の極まで近づ
はて洗ひ度ひたまへ其處より拂乃もた革の幕
にて猶葉薪水とすりけり事に度外見らば
彦子の心不てはひ行是を一時終ニ水下が切ら候せら
水勢はく活きる事無し蟻死をもにいたる事無
か死序一終ノス水下が及水を終へゆ一かれて
三四日はくしづれ候てちばらへまとまく車子の底見

て走り出立てば父のめぐらてちば一太槻幼少の
程ハ食ふ蘇油にて食ひ走りてあひ度に附ハ其止て
又二入石へまよひ小走り直ぐまた附ハ又見久石入室
大槻身の時ハ走り度外すと武三井も入て走りて
水下が田かうきの田の水流を入て速熟りりふどひすり水一油
みて所を走ればまて害れずれ一軒モ水下の田水林立水
水口、蘇油を先々走合程いき追く水波はくまへ油合

て水を連ましりべぬより見合ひもくして大神睡一月の
小舟乃滿はぬ油よ隅をすまつてすまへおとせま乃
第とりて橋より水城アリとして一月庄じをえをま水をま
しをはゆべ 脂身鷺 橋林と梅の如きハ移行物をば

たとて如は田乃
中へをふへらさ
はずふそれれ
鷺えれ附ひの



舟宿のうれ花の三方ノ知くしておべ

○双方船屋乃はあの方の外とぞげふよ蟬声に附る
中くち車がけ色ハ先田乃水下とせきぬ水井を走相作の
筒乃大れす小模、かこれ少代の舟をと一其草上へ油を
入函よ入て捨代ぬき被ふく水井へ油代へとぞ、が
是を人せもの曲乃筆代りて油とす——金持にて教
人を事ばすに候てお古を御前、敵兵工入様代一様、を立
のよりてかくお右乃手て様の中へ油代へす様

竹の角
油と入し水
中入る
子

油と入し水
中入る
子

油と入し水
中入る
子

て水をすりひそむりべーをぬれへりふれへ鳴けふ

立あらびて移て又數十人同トく厚行まちうび石のま

に長サ武尺径の竹をりそたり乃木と同

ひだり

ひだり

ひだり

ひだり

ひだり

ひだり

りうち右れま小松そる井戸で株をなきて植え水中みだ

立あらしてぬへり

ひだり

ひだり

ひだり

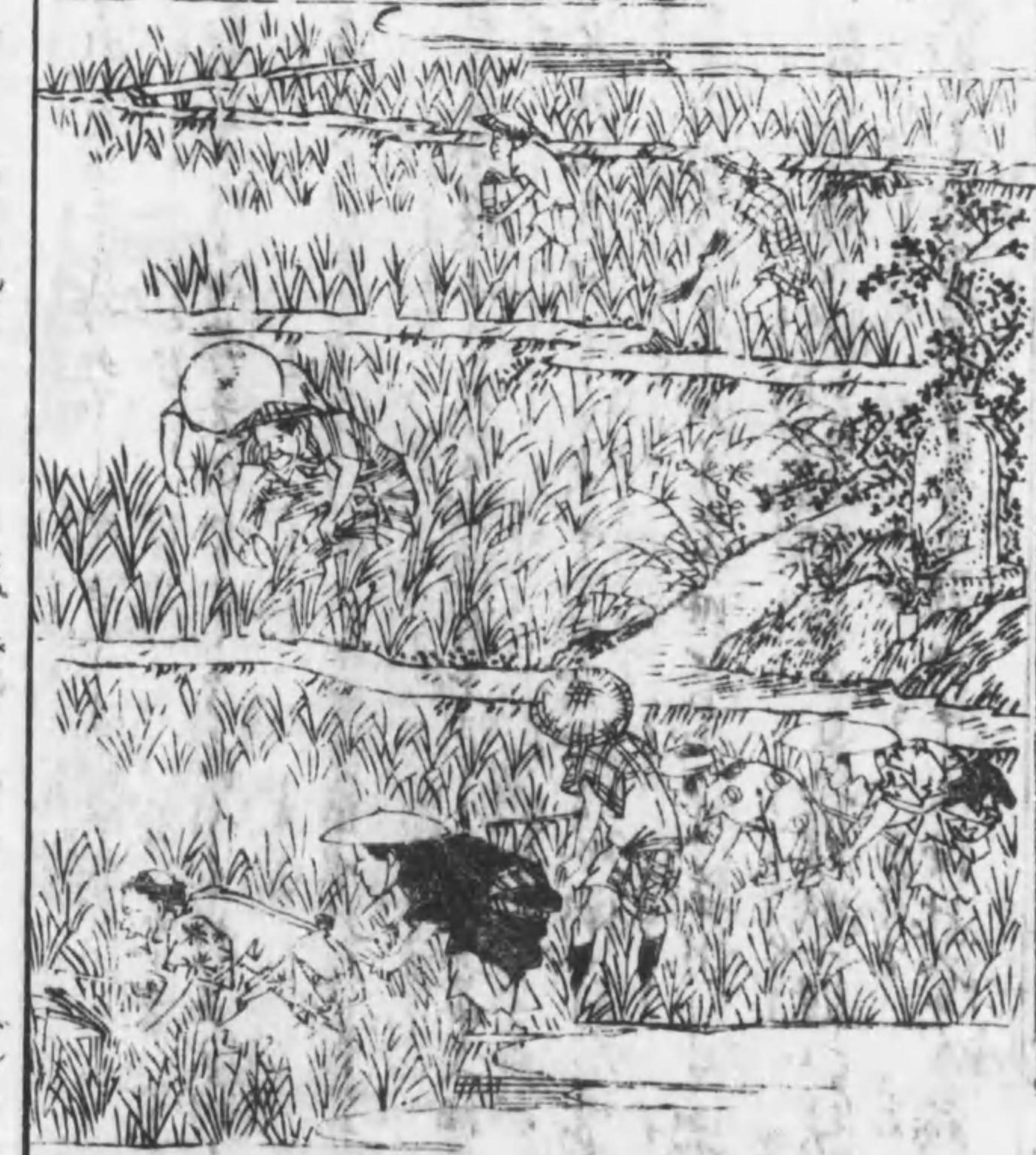
ひだり

ひだり

見てあらうへ先づ水を磨一又新ふたをあ日乃

如くもぐ一四五度もめぐせざんへ車去び一ニふぐみ

もぐみへ去びたりの



○人教導了事半臾村中云舍せ集りて互ふかげそべー大勢力集
る車ゆく其中五へ婦人童子性えもまーとハ鉄効と彦森
温沙投つけ水をうけ合ふどーと多様出候中々す一脉ノシニ
追毛角田坪火緩模ホ延長車うちとハイ村の名を人是さ
まーとお体てひよー

○蟻吏されば多反の田ふ武二年ごにスミソリ入へづかまし候三本

にモサリヘベー葉経手油もとべ無油の信へべー

○又方蘇油セ合モ燭ホテ焚火とくよれたな付玉ろーと也
石丈大丈の身所ぬー其油乃中ハ硝と三合入て候く和乃

ヤウモビ(太太も冷され)油と硝と三合モ其田ふ燭とお行睡ふ脣モ
後ヘツイとへき燭をうけ替へー(火)これば又(火)てもよー

ぬ茶条の如く大竹の筒小入て田にとく・屋ーとくよう

三四尺乃葉盆代りて移候三四遍ばとひあ空の水在

うべー翌日又器のやへーと煙火とひ彦入

珠あふれ又油もくあらとがゆて増加モて後生代を天

氣候晴の日中はふるうとへ喜物すくまー

硝と入え油のも

油を舟のうりみと手捕ふ水井に入え小油と入て和子

と谷

○又方旱魃ーと水もすゝ田の中干割たるは一五分
半舟のうりみと手捕ふ水井に入え小油と入て和子

と谷

陰劍鏡



ナガキミセたうのす小提石川ふせられ極めてこくら
たあ幕やう乃うの成りうち猪口油水ふみたーとへ船稼
あ込く一去て行へー左幅乃乳毛子にひくへばざれ左
其先かき人油の入るす桶代おで鷄代よけてりへー味
う右の仰へして降れ、一日是合ひのどくーをモヘ
①蟹入煌生じて喰事せばとそは夷だ鷄株をふくらす
へきすす捨金車 実よりつたあき車と作事耕す
まきこき せんとぞく まきこき まきこき
まきこきの子年方若友ふもて見とふもべも蟹きり

○又方田の下に作られて
人世^{よの}へとよきを反^かる田水^{みず}五七石^{せき}も其上^{じょう}あて
捨^すかれて孟^おバ付^つ事^{こと}あらずまくされて至^しれども
人^{ひと}ちのうの方^か乃^の極^{きわ}の上^うと志^し之^の行^はかめで勤^はうせば松^{まつ}乃^の乃^のを
拂^はふべー○又ハ夜^よるれ四ツ角^{よのづか}がね門^{もん}を田^たの壁^{かべ}上^うに拂^はふ中^{なか}分^わ
拂^はふべー○又ハ夜^よるれ四ツ角^{よのづか}がね門^{もん}を田^たの壁^{かべ}上^うに拂^はふ中^{なか}分^わ



犯松原へ一けめに蟻集り大木へておきはるは翁の
行燈の事あり相あそびて塙ハ油よて香ひより亦至る

術年

○板浦入んと學田の先水と齊反田の偏又水と
彦一木とひ五日峰山下す田をあすと又押
引て一篇もべ一申まえどもかく津のゆみし者に
ハトの水宿もとを折る水代りて浦へ入る一喬
水と人ゆ乃幼序

○又云浦入る田より燈うる車ひす甚府へ田れぬ
だ不巧ノよ之燈ぬき不へ別ふとゆ浦へ入る今て春
頃より去下

○又云浦入る田より燈うる車ひす甚府へ田れぬ
日向み様通毎日浦へて拂之

○又云歲内乃歲末今年燈行る車ひす甚府へ
田の差利車をほほ浦へて植たむに化乃田ハ燈生せ
非其田而已か一も生せず

○又云冬うす春よりけを候不候不候付とも少く望半
も少くのりとが其處に及ぶる油よしと水よし萬能經
油よしと水よし五合を鉢舟より今一組今うへ水よ和

田面よあへて豆一粒一粒の豆の付へ水りちまく
田乃よあへて豆一粒一粒の豆の付へ水りちまく
大ひふ利

田に油代入る心はの事

右小紀にて御のまうすへ豆よまほ見ぬじなまく
まちせん強子へー粒方らどへてととととととととと
ひ其軍へに小石たびひとへー

- 未至稻の付理生トテ豆と見ゆ附へて一反、醸油
あらびニ豆合菜柱よ油豆不の油豆よへて豆合代入べ
名とス見合合トテ豆れべ大汗ニ豆よて豆豆と豆豆
○油豆よへて豆豆へ醸油豆ても六セ合豆四五度もいき
うと、增減長じて情強豆豆よて豆豆よて豆豆よて豆豆
豆豆よて豆豆よて豆豆よて豆豆よて豆豆よて豆豆よて豆豆

今ノ鷦の勢弱シテ極乃小力シテアリ。ふとく
入夜陣圖ハ神多シ。之の多バ鷦も多モ。かうニ事
ナリ其敵羽角丹誠一。而ハ降伏。車セドモ油ツキシム
モケビ。船乃至人。トモ須入。而起。トモアテ。船
船若葉はり。其財墮落。さればおまへ。うそす。モ。極十
シ。金子。ヒ。ト。ハ。食。入。ら。レ。シ。急。く。入。る。シ。ア。ク。入。る。シ。ア。ク。力。に。成
て。極の。金。失。し。害。か。ま。る。シ。の。次。ハ。油。伏。ツ。ミ。ア。リ。不。幸。く。ハ
ホ。一。心。ひ。き。事。あり。

○小名の者を地主。甲に金袖。アラヒ。ス。集。ア。リ。ハ。是。ニ
地。主。シ。テ。ハ。油。伏。ツ。ミ。ア。リ。而。ハ。除。ふ。ヘ。引。い。レ。テ。自。家。乃。皆
料。シ。マ。シ。ト。云。疑。心。ち。つ。シ。ト。ほ。ん。ま。ニ。事。ナ。リ。是。等。ハ。極
ナ。リ。金。子。キ。ア。リ。舟。深。キ。リ。而。ハ。極。モ。多。シ。之。地。の。事
ナ。リ。而。ハ。出。大。シ。同。根。小。如。得。生。キ。モ。ナ。リ。バ。田。地。房。翁
ナ。リ。富。農。玉。ハ。必。備。油。乃。心。ナ。リ。ハ。ム。一。心。ひ。き。事。あり。

右除蛇の方ハ。サガ。雲。傳。見。及。ビ。ナ。モ。ア。リ。ト。記。シ。テ。モ。

附錄金

事成すを以て國人乃より引よされ奉りと林を守
書はれとけぬ所れども農へ老弱よりばと其道ふ
矣ト人程又より仕方と爲ひうらやアガホミ
ラセキタニシテシナシモアラムナリ
を希ムヘンノモ飢饉乃と之等ノ下モ其患シテ
而シテ備のあき事ナリケモ行シテ老者の介護
ト連シ或老人云飢饉の氣ナリハ年少者ナリ
車水メ首反ナリ人暑の氣ナリウル候陰冷小一而雨
シテ布子と着せざれば漫ざれ程不景氣モ扇ヘ吹シテ增ヘ
生バクイのあれば是モのまゝ天よりを也大風有ビ
ハラカラ油乃カホてゆセレベテシテムトニ是至極の事
外て大風のトノハ皆ニテ吉保天明乃画作也人暑中
布ふ埃着候如き冷氣みて蝗生シタモモ伊波リ
ぬヤダたる國ハ後藤義定三四分も未だアセサシモ
く鷹畠み多モモ小去ニ酉年ハ正月年移リ不外
ハ御子子れヨリ藏内ナリ東小の木に蝗生シト移入シ

後に承傳より云如く沖ノリと云ひてはまく申
寅年中平成たり是全く沖の功績あり也又是
事後も塙生御はへば方爲用ひ多ひるが故に再三の
事下りてせむらか一赤心小又もよしは

文政九丙戌歲

九月 黃葉園藏



曲京三條通升屋町

同寺町通松原下ル

勝 村 治右衛門

大阪心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同安堂寺町

秋田屋太右衛門

東京横山町一下目

出雲寺萬次郎

同日本橋通壹下目

須原屋茂兵衛

岡芝神明前

岡田屋嘉七

同馬喰町四丁目

吉田屋文三郎

書肆

終